

児童養護施設における職員のバーンアウトへの 予防的介入についての研究

— バーンアウトの現状に関する実態調査を中心に —

A study about preventive intervention for Burnout at children's homes staff
— Focus on present condition of Burnout —

田島耕一郎* 谷島 弘仁**

Kouichirou TAJIMA, Hirohito YAJIMA

要旨：児童養護施設職員はその専門的な職務故に非常に強い心理的負担を強いられている。本研究では児童養護施設職員の感じるストレスをバーンアウトの概念を用いて理解・把握し、その予防的介入についての示唆を得る事を目的として質問紙法による実態調査を実施した。その結果、他の対人援助職と同様に一定数のバーンアウトを示す職員の存在が確認された。さらには、バーンアウトの傾向の特徴としては個人的達成感の低下が挙げられたが、その背景として児童養護施設職員には若く、経験の浅い職員が多くバーンアウトに至る過程にある者が存在していることが示された。同時に実施したGHQ（一般精神健康質問紙）からは児童養護施設職員は精神医学的にはその多くが非病的な状態にあることが示され、職員の感じているストレスをバーンアウトの概念で把握し、介入を実施する事でストレス低減効果を期待できる事が示唆された。

キーワード：児童養護施設、バーンアウト、予防的介入

I 問題と目的

児童虐待に関する全国の児童相談所の対応件数は増加する一方であり、虐待を背景とした児童養護施設（以下、施設）への児童の入所が増加している（厚生労働省、1997; 厚生労働省、2013）。坪井（2005）によると施設入所中の被虐待児は社会性や注意の問題に加えて攻撃的な行動傾向を多く示す事が指摘されている。施設においては養育者である施設職員（以下、職員）が

* たじま こういちろう メンタルホスピタルかまくら山

** やじま ひろひと 文教大学人間科学部

その対応を行うが、その中で感情的、肉体的に多くのストレスに曝されていると考えられる。職員の示すストレス反応としてバーンアウトを取り上げた藤岡（2007）、村尾ら（2003）によると完全にバーンアウトしている状態にある職員は少数だが、バーンアウトへの移行過程にある職員は全体の51%に昇る事が示されている。Maslach&Leiter（2008）によるとバーンアウトへの移行過程にある個人は完全にバーンアウトしている状態より変化しやすい事が示されている。このことから、児童養護施設職員の多くは完全にバーンアウトしている状態の手前の状態にあり、予防的介入が必要な状態にある者が多く存在する事が示唆され、職員のバーンアウトの進行を予防する事が職員の心理的安定を支えるだけでなく入所児童の生活の安定にも寄与すると考えられる。しかし、施設職員のバーンアウトの予防に関する研究は少なく、実践的な研究が求められている状態であると考えられる。そこで、本研究では職員のバーンアウトの程度とその傾向を把握し、職員のバーンアウトを予防するための予防的介入についての示唆を得る事を目的とする。

Ⅱ 方 法

本研究ではA県内3施設の職員140名を対象に質問紙調査を実施し郵送にて回答を求め、45名から回答を得た（回収率32.1%）。質問紙には年齢、性別、勤務年数に記入を求めるフェイスシートの他にバーンアウトの程度を示す質問紙としてMaslach Burnout Inventory 日本語版（MBI）、一般精神健康質問紙28項目版（GHQ-28）、予防的介入の示唆を得るための質問紙として仕事との関係尺度（AWS）を使用した。

Ⅲ 結 果

質問紙調査の回答者の内訳は男性11名、女性34名、平均年齢は32.1歳（SD11.3）だった。平均勤続年数は7.1年（SD8.0）であり、勤続年数が3年以下の職員は全体の42.2%に昇った。次に、職員のMBI・GHQの得点の平均と標準偏差をそれぞれTable1-1、Table1-2に示す。次に、田尾・久保（1996）が作成した診断表を参考にバーンアウトの程度をTable1-3に示す。次に、教師のMBI得点を測定した貝川（2009）、病院に勤務する看護師のMBI得点を測定した水野他（2009）、との比較の結果をTable1-4に示す。以上の結果から、全体的なMBI得点を概観すると多くの対人援助職と同程度の得点を示している。

Table 1-1 児童養護施設職員の MBI 得点

	男	女
	M (SD)	M (SD)
脱人格化	11.9 (4.6)	12 (4.6)
情緒的消耗感	14.6 (5.4)	14.5 (5.4)
個人的達成感の低下	14.7 (4.4)	14.9 (4.5)

Table 1-2 GHQ 得点と臨床群の割合

	M (SD)	臨床群 (%)
身体的症状	2.95 (1.9)	5 (11.1%)
不眠と不安	2.91 (2.0)	5 (11.1%)
社会的活動障害	1.75 (1.9)	1 (2.2%)
うつ傾向	1.14 (1.6)	0 (0.0%)

Table 1-3 児童養護施設職員のバーンアウトの程度

	情緒的消耗感	脱人格化	達成感の低下
大丈夫 (40%以下)	29 (64.4%)	25 (55.5%)	13 (28.8%)
平均的 (40～60%)	2 (4.4%)	7 (15.5%)	6 (13.3%)
注 意 (60～80%)	3 (6.6%)	6 (13.3%)	12 (26.6%)
要注意 (80～95%)	11 (24.4%)	5 (11.1%)	8 (17.7%)
危 険 (95%以上)	0 (1.1%)	2 (4.4%)	6 (13.3%)

Table 1-4 児童養護施設職員・教員・看護師のバーンアウトの程度

児童養護施設				教 員				看護師			
情緒的 消耗感	脱人格化	達成感 の低下		情緒的 消耗感	脱人格化	達成感 の低下		情緒的 消耗感	脱人格化	達成感 の低下	
大丈夫	64.4%	55.5%	28.8%	大丈夫	3.6%	60.9%	15.2%	大丈夫	35.1%	41.5%	27.0%
平均的	4.4%	15.5%	13.3%	平均的	41.3%	34.8%	31.9%	平均的	22.3%	23.0%	16.1%
注 意	6.6%	13.3%	26.6%	注 意	35.6%	4.3%	52.2%	注 意	16.3%	15.8%	26.3%
要注意	24.4%	11.1%	17.7%	要注意	15.2%	0.0%	0.7%	要注意	18.5%	12.7%	21.0%
危 険	0.0%	4.4%	13.3%	危 険	4.3%	0.0%	0.0%	危 険	7.8%	7.0%	9.6%

Ⅳ 考 察

バーンアウトの現状について

本研究において職員の MBI 得点は教員・看護師などの他の対人援助職と同様である事が示された。それと同時に GHQ の得点では「身体症状」「不眠と不安」の得点において約 1 割の職員が顕在的な症状を示しているが職員の多くが非病的な状態にある事が示されている。このことから、職員の感じているストレスの状態は非病的な状態であるが、Table1-3 に示されている様に下位尺度の項目では“注意”以上の得点を示している者も多く存在し、藤岡（2007）、村尾ら（2003）の知見と同様のバーンアウトに至る過程にある者が一定数存在するという傾向を示している。これは、Maslach&Leiter（2008）に示されているバーンアウトに移行する過程にあってその状態が変化しやすい状態にある者と考えられる事が可能である。

元来バーンアウトの概念とは病的な状態の前段階としてのストレス反応として捉えられてきたが、本研究においても GHQ、MBI の得点から同様の理解をすることが可能であり、職員の感じるストレスをバーンアウトの概念を用いて把握することが適切であることが示唆されているものと考えられる。また、その程度としてはバーンアウトへの移行過程にあるものが多く存在し、バーンアウトを未然に予防するためにはこの状態に対する予防的介入の必要性が感じられる。

予防的介入への示唆について

従来のバーンアウトの概念では情緒的消耗感がその中核症状であると考えられてきた（田尾・久保、1996）が本研究では“個人的達成感の低下”の項目で“注意”以上の得点を示すものが多数存在した。神田・森本・稲田（2009）によると 3 年目までの経験の浅い職員が不全感を感じやすいとされているが、本研究においても 42.2% の職員は勤続年数が 3 年以下であり同様の傾向が示されているものと考えられた。しかし、その一方で平均勤続年数が 7.1 年（SD8.0）であることから経験の浅い職員とベテランの二極化が生じている事が示唆されている。また、予防的介入の示

唆を得るために実施した AWS においても個人の感じる問題意識は様々である事が示されている。

以上より、本研究に示されたバーンアウトに対する予防的介入の観点からは個人的達成感の低下に対するアプローチが必要であると考えられるが、その背景には比較的経験の浅い若手職員の感じる仕事に対する不全感とベテラン職員の感じる問題意識を分けて考える必要があるものと考えられた。AWS の結果からは個人でも問題意識の持ち方が様々であり、個別の問題意識を抽出しながら介入を実施する必要があるものと考えられる。予防的介入についての先行研究では個人を対象に心理教育や自己理解を深めるアプローチを行ったものも存在し、その効果も確認されている（野田ら、2007; 高田ら、2002）。しかしその一方で、水野ら（2009）は看護師を対象にソーシャルサポート・コミュニティ感覚がバーンアウトの緩衝要因となるという仮説のもとに集団形式でのバーンアウト予防プログラムを実施し、脱人格化を軽減し個人的達成感を高める結果を得ている。

まとめ

本研究の結果、児童養護施設職員は他の対人援助職と同様にストレスを感じ、そのストレスに対する反応をバーンアウトの観点から理解する事が可能であると考えられ予防的介入の必要性が示唆されている。先行研究と本研究との知見から予防的介入への示唆としては個人、若しくは集団に焦点を当てたアプローチはどちらも予防的介入の効果を期待する事は可能であると考えられる。児童養護施設の特性上、独特の施設の風土が存在することが想定される。AWS の結果からも個人によって問題意識は様々であり、個人個人を対象としたアプローチに加えて、その背景にある職員の所属する集団を想定しながら予防的介入を実施する必要があるものと考えられた。

引用・参考文献

- 藤岡孝志（2007）「児童福祉施設における職員の「共感満足」と「共感疲労」の構造に関する研究」 日本社会事業大学研究紀要、54、75-116
- 貝川直子（2009）「学校組織特性とソーシャルサポートが教師バーンアウトに与える影響」 パーソナリティ研究、17（3）、270-279
- 神田有希恵 森本寛訓 稲田正文（2009）「児童養護施設職員の施設内体験と感情状態—勤続年数による検討」 川崎医療福祉学会誌、19（1）、35-45
- 厚生労働省（1997）児童養護施設児童等調査
- 厚生労働省（2013）厚生労働白書
- Maslach, C&Leiter, M, P（2008）「Early Predictors of Job Burnout and Engagement」. *Journal of Applied Psychology*、93、（3）、498-512
- 水野正延 小林貴子 植村勝彦（2009）「病院に勤務する看護師に対するバーンアウト予防プログラムの効果」 岐阜医療大学紀要、（3）、209-217
- 村尾泰弘 石井富美子 枅尾 勲（2003）プロジェクト研究「児童養護施設における『被虐待児』の対応について」 立正大学社会福祉研究所年報、5、9-110
- 野田さとみ 濱口佳和（2007）「児童虐待相談による児童福祉士のバーンアウトモデル 子どもの虐待とネグレクト」、9、213-224
- 高田未里 種市康太郎 小杉正太郎（1999）「職場ストレススケールに基づくインテーク面接が心理的ストレス反応に及ぼす影響」 産業ストレス研究、9、115-121
- 田尾雅夫 久保真人（1996）「バーンアウトの理論と実際—心理学的アプローチ—」 誠心書房
- 坪井裕子（2005）「Child Behavior Checklist/4-18（CBCL）による被虐待児の行動と情緒の特徴—児童養護施設における調査の検討—」 教育心理学研究、53、110-121